

ニュースレター

NO. 11

2001.6.30

名古屋大学大学院 国際開発研究科

発行 ☎464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ 052 789 - 4953

FAX 052 789 - 4951

GSID ホームページ <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp>

NEWS

18名に博士号授与 !!

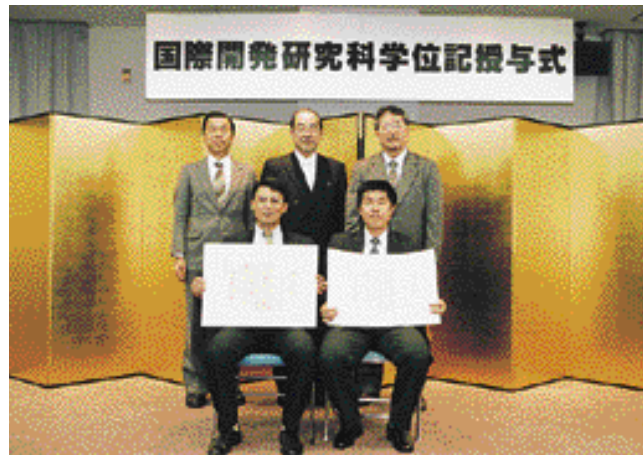
2001年 3月26日に学位授与式が行われ、2000年度は実に18名の方が博士の学位を取得しました（うち論文博士学位1名）。内訳は国際開発専攻5名、国際協力専攻6名、国際コミュニケーション専攻7名、その他1名。

1995年度に第1回博士学位授与を行ってから、これまでに71名が博士学位を取得しました（2001年6月12日現在）。なお、昨年度分を含むこれまでの学位取得論文タイトルについては、GSID ホームページに掲載されています。

URL: <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/outinfo/research/pub/phd/katei-jp.html>



国際コミュニケーション専攻



国際開発専攻

74名に修士号 !!

また同日には修士学位授与式も行われ、総数74名（国際開発専攻30名、国際協力専攻22名、国際コミュニケーション専攻22名）が修士の学位を取得しました。74名のうち12名が進学、26名が就職、研究生が7名、帰国等が29名となっています。



国際協力専攻



修士学位授与の様子

スタッフ紹介

GSIDに3名の新しいスタッフが加わりました。



国際協力専攻 助教授
伊東 早苗

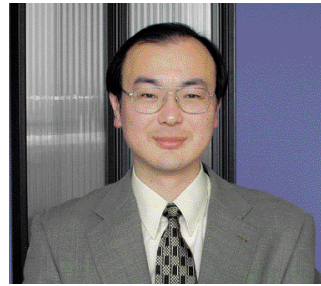
2001年1月に新任教官として本研究科に着任しました。私は学生としての大学生活は長かったものの、大学に勤めるのは初めてでしたので、新しい職場に対しては興味津々でした。イギリスで勉強していた頃、日本から訪問される大学の先生方（特に女性）から、「日本の大学は陰険なところ。大学生は高校生をイメージして考えてもらった方がいい。」などとお聞きしていましたので、正直いって、当時日本の大学に就職する気持ちはまったくありませんでした。

ところが、帰国後、縁あって本研究科に採用が決まり、実際に勤務してみると、以前にイメージしていたのとは全く違い、大学は「極楽」のような所だと実感するにいたりました。大学一般がそうなのか、たまたま自分が所属する本研究科がそうなのか、まだわかりません。しかし、これまで「陰険」ないじめを受けたこともなく、学生も院生会や国際理解教育プログラムなどを積極的に運営しており、頼もしい限りです。私自身が大学を卒業した頃は、自分が何をしたいかもよくわからず、結局この歳にいたるまであちらこちらをふらふらしてきたため、今の学生の就職に対する真剣さには、まったく頭が下がる思いです。

ところが、帰国後、縁あって本研究科に採用が決まり、実際に勤務してみると、以前にイメージしていたのとは全く違い、大学は「極楽」のような所だと実感するにいたりました。大学一般がそうなのか、たまたま自分が所属する本研究科がそうなのか、まだわかりません。しかし、これまで「陰険」ないじめを受けたこともなく、学生も院生会や国際理解教育プログラムなどを積極的に運営しており、頼もしい限りです。私自身が大学を卒業した頃は、自分が何をしたいかもよくわからず、結局この歳にいたるまであちらこちらをふらふらしてきたため、今の学生の就職に対する真剣さには、まったく頭が下がる思いです。

しかし、ふらふらしてきたおかげで、そうでない人には得られない体験をしてきたことも事実です。私は職歴と学歴をあわせると、途上国（バングラデシュ）、日本そして欧米先進国（イギリス）の、民間企業、援助機関、私立大学、国立大学、政府系研究所、民間研究所、非営利団体に色々な形で関わってきましたので、各組織の運営形態の違いや、構成員の労働観、ひいては人生観の違いに至るまで、自分なりに様々な洞察を得ることができました。そしてこうした洞察が、今の自分の価値観の一部を形成しているといってもいいでしょう。

最後に本研究科での抱負ですが、僭越ながら本研究科の将来を考えようとすると、どうしても今の日本の政局と重なってしまいます。これから日本の大学運営が危機的状況に突入する中で、今必要なのは、研究科独自のアイデンティティの確立と、それに沿った思い切った「構造改革」ではないでしょうか。自分の未熟な研究業績を向上させることが先決だろう、と言われてしまいそうですが、それはそれとして(?)、本研究科の国際的競争力を高めるために、他のスタッフと協力し、力を尽くしたいと思っています。



国際コミュニケーション専攻 助教授
大名 力

昨年(2000年)の10月に群馬大学からこちらに参りました。

現在、「言語文化情報システム論」や「情報処理」

などを担当しています。そのため「コンピューター関係の何か」が専門と思われるようですが、専門は英語学・言語学です。着任して半年以上経ちますが、専門は英語学・言語学であるということ、意外な顔をされることが少なくありません。名前は変わっているのですが覚えてもらえますが、専門の方はそうはいかないようです。

昨年9月までいた群馬大学の社会情報学部というところは人文・社会科学と情報学との融合を謳った学部で、いろいろな分野の人がいました。最初の頃は「英語学が専門」と言うと「英語の先生ですか。では、文学が専門なんですね」と言われたものでした。専門は文学ではなく言語学(英語学)であると理解してもらうのに時間がかかりましたが、こちらでも専門が何かわかってもらうのに時間がかかりそうです。私の方も、初めて名前を聞く分野もあり、他の方の専門を覚えるのに時間がかかりそうですが、少しずつ覚えていきたいと思います。

具体的な研究の内容ですが、現代英語の文法(主として統語論)を研究しています。英語の文法と言っても、英語学習のための文法ではなく、ネイティブスピーカーの頭の中にある文法(言語知識)のことで、それがどのようなものか、また、それがどう習得されたのかを明らかにすることを目指しています。

子どもが言語習得の際に接する資料の中には、文法を習得するのに必要な情報すべてが含まれているわけではないため、直接的な資料がなくても、結果として大人と同じ文法を習得可能にする「仕掛け」が必要になります。生成文法と言われる言語理論では、生得的で人間という種に普遍的な言語獲得機構により、習得時に接する言語資料と習得される文法の間ギャップを説明しようとはしますが、私は基本的にこの考え方に沿って研究を行っています。

言語知識は頭の中にあるものなので直接観察できません。したがって観察可能な言語事実を基に仮説を立て検証していくこととなりますが、最近ではその作業にコーパス(電子化テキスト)を利用しています。コーパスを利用することで、少し前までは事実上不可能だったようなことも調べられるようになり、今ではコンピューターは研究にかかせない道具となっています。

名古屋大学には優れた研究者が多く、またコーパスを利用する環境も整っているため、大いに刺戟を受けています。

私も、微力ながら、より良い環境になるよう頑張りたいと思いますので、宜しくお願いいたします。



国際開発研究科 助手
野田 真里

この1月より、名古屋大学大学院国際開発研究科助手に着任いたしました、野田真里と申します。本研究科は私にとりましては母校であり（1999年博士後期課程満了）このたび教官として戻ってこることが出来たのは大変光栄でありますと共に、その責務の重大さには身の引き締まる思いであります。

本研究科を満了後、私はロンドン大学にて研究する機会を得ました。また、NGO等を通じて海外の国際協力の現場で働いた経験もございます。こうした中で気がついたことは、アジアで一番の発展を遂げた日本の社会経済、そして世界一となって久しい日本の開発援助はいやおうなく世界の注目を集めているということです。

私たち国際開発に携わる研究者はこうした声に応えるため日本からも世界にメッセージを発していかねばなりません。そして、世界に通用する国際開発に人材を輩出していかなければなりません。本研究科は設立より十余年を数える我が国でもっとも歴史と実績のある開発大学院であります。本研究科はこれまでの先達の成果を基礎としつつ、日本の開発学のthe centre of excellencyとして、日本やアジアの特長を生かしつつも、世界に通用する大学院として更なる飛躍を遂げて行く必要があると考えています。

私も本研究科の末席を汚させていただく一員として、こうした先達の皆様にならい、本研究科の発展、ひいては日本の開発学、開発援助の発展のために皆様と共に精一杯精進させていただき次第でございます。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

学生通信

現在GSIDに在籍されている方の中から、2名の方にGSIDについて語っていただきました。梅村尚美さんは、GSIDの博士後期課程に在籍しながら、JICAのジュニア専門員としてネパールでご活躍され、この4月に復学されました。多賀寿江さんは、一度修士課程を修了されて職場復帰された後、再びGSIDの後期課程に入学された方です。このように一度外からGSIDを見る機会があったお二人にGSIDの魅力などを語っていただきました。

「GSID流？」

国際開発専攻 博士後期課程3年
梅村 尚美

今の私は紆余曲折を経て、40歳を過ぎて博士論文を執筆している。ごく普通の国家公務員から国際協力の世界に足を踏み入れたのが13年前。青年海外協力隊員としてフィジー共和国に派遣された。その後帰国し、国際協力の必要性、またより良い協力のためには、実践とその理論的フィードバックのサイクルが必要であると痛感して、その実践が出来る大学院を探し、出会ったのが名古屋大学の国際開発研究科だった。当時、国際協力を研究する途上国の留学生や、国際協力の実践後改めて研究を希望する者に対して門戸開放している大学院はほとんどなかった。

農村女性が村落社会の構成員としてジェンダーフリーな側面から、地域の生活向上や開発に参画していくにはどうしたらいいのか、そのために部外者や国際協力はどのような手法で支援、協力していくべきなのかを実証的に研究しているが、そのために国際開発研究科は大変魅力的である。

途上国援助の中では比較的新しい研究領域であるジェンダーは横断的であり、多分野から関連する事項を収集しなくてはならない。開発運営、教育、経済、法律、文化、歴史と様々な角度から総合的にアプローチしていく上で、それぞれの分野について専門的アドバイスをタイムリーに受けられる環境が整備されているのである。

また、修士課程の同期、開発運営ゼミの10人の仲間は私と助教として九州で教鞭をとる台湾出身の王さんを除き、実に8名がオーストリア、ガーナ、パプアニューギニア、タイ、インド、スリランカ、アメリカ、パラグアイの世界各地でそれぞれ活躍している。こうした世界に広がる心強いネットワークが研究をサポートしてくれていることは言うまでもない。

後期課程に進学した後、研究テーマを深めるためにも理論と実践を重視していきたいと考え、国際協力事業団（JICA）のジュニア専門員として3年間、実務研修をさせていただいた。1年間は本部企画部で教育分野の援助政策について、その後2年は社会ジェンダーのJICA専門家として、ネパールで実施されている「村落振興・森林保全計画」に携わった。その間、名古屋大学がJICAから委託されて実施した、「ネパール王国の農林水産業における



JICA技術協力評価」について、現地で活動するJICA専門家の立場から協力させていただき、その調査・分析手法については実践として多くの示

唆をいただいた。

帰国し、論文執筆中である現在、痛切に実践とその理論的フィードバックのサイクルの必要性を感じている。研究テーマはもちろんのこと、国際協力支援は常に新しいニーズが生まれ、その対処にはそれまでの経験の蓄積が必要とされるのだ。それを科学的に冷静に評価、研究する研究機関と実施機関の協力体制はますます重要度を増していくのではないだろうか。幸いなことに、大学研究機関やJICAも時代に合わせて変わろうとしていると思う。例えば学業とともに、JICAの第2次ネパール援助研究会のジェンダー分野アドバイザーをさせていただいている。

就職等クロスオーバーな者を受け入れてくれる体制はなかなか整っていないと感じるが、たゆみない日々の積み重ねをし、開発協力でこれからもお役に立てるよう努力していきたいと思う。研究も大切に思っているが、途上国と一緒に働く女性たちの笑顔も見たいのである。懐を大きく見守ってくださるGSIDの諸先生方またGSIDの学風に感謝している。

「GSIDに思いをよせて」

国際協力専攻 博士後期課程1年
多賀 寿江

私は、今年4月からGSIDとの再会にいろいろな思いを寄せながら、国際協力専攻で学び始めました。GSIDとの最初の出会いは、1994年4月に国際開発専攻前期課程に入学した時です。経済産業省（当時は通商産業省）が主管である経済協力団体に当時勤務していた私にとって、それは職場を2年間休職しての進学でした。

私がGSIDで学ぼうと思ったのは、私が大学生のころは国際開発に携わる人材養成のための研究科が国内にまだ存在せず、国際開発分野の知識を学際的かつ体系的に学ぶ機会を得ることが容易ではなかったため、そうした研究科が創立された際には「学ぶ場」に再び戻りたいと考えていたからです。また、社会人として開発途上国を対象とする人材育成事業の一端を担う業務に就いた私は、自分の携わる協力事業が日本の援助事業全体の中でどのように位置付けられるのかを問い直し、ひいてはより広く各種分野において日本の開発途上国に対する国際協力がいかなる貢献をしているのかについて問い直してみたいと考えるようになったからです。

実務経験を少なからず積んでいた私はさまざまな疑問や興味をもっていましたので、GSIDで過ごした2年間は私にとってそれらを満たすための知的刺激に溢れた有意義な時間でした。当時を今振り返れば、GSIDが異なる国籍のさまざまな社会経験を有する人々が集い共に学ぶ場であったこと、そしてより実践的なアプローチがとられていたこ

とが、現在の業務を遂行する上で間接的に影響を私に及ぼしていると感じます。

さて、前期課程を修了後以前と同じ職場に復帰した私は、再び経済協力の現場で実務を積み日々を送っています。GSIDの前期課程を修了してから5年が経ちました。その間に私が携わってきた業務内容は基本的には人材育成関連事業であることに変わりありませんが、民間ベースによる「日本国内」での技術者・管理者育成事業から「海外」での技術者等の育成事業へと業務内容が移りました。また、最近ではアセアン諸国の中核的な研修機関に所属する現地の人たちとともに人材育成事業を実施する機会が増えています。現地の関係者とコミュニケーションする中で私は、「日本の過去の経験を十分に知ることによって、その経験をこれからの協力事業にどのように活かすことができるのかを考える必要性」を感じています。そして、この思いをはじめGSIDに寄せるさまざまな思いが、現在の仕事を継続しながら更なる研究を続けたいという願いになり、今春GSIDとの再会を果たしました。



私にとってのGSIDは、経済協力事業分野の実務で得た経験を知識で体系的に捉えなおし、それを再び実務の世界で応用することを可能にしてくれる場です。

NEWS

大学祭（6月6日～6月10日）の期間中に『市民フォーラム』がGSIDで開催されました。昨年度の「平和構築ワークショップ」に引き続いて、GSIDの学生が主催したこのフォーラムについての報告です。

「市民フォーラム シンポジウムを終えて」

国際協力専攻 博士後期課程2年
中村 真咲

今年度は「国境なき医師団」（以下、MSFと略）日本を招待して、GSID市民フォーラムシンポジウム「人道援助のジレンマ～国境なき医師団の事例から～」を、6月10日（日）14:00～16:30にGSID8階オーデトリウムにて開催致しました。

MSFは1971年にフランスの医師達によって設立され、医療援助を中心とした緊急人道援助で卓越した成果をあげてきたNGOであり、1999年度にはノーベル平和賞を受賞しました。MSFは、我が国においても知名度が高く、その運営システムは多くのNGOや政府開発援助の関係者からも注目されており、名古屋において講演会などは

開かれたことがありませんでした。そこで、MSFの活動をテーマとしてシンポジウムを行なうことは、より多くの市民に興味を持ってもらうために最適であると考えたのです。



シンポジウムは、

- 14:10~14:30 MSF 日本スタッフの基調講演
(MSFの理念、歴史、課題) 入井智子氏
- 14:30~14:50 MSF 日本からの報告(タイ・カレン族難民キャンプおよびグルジア共和国アプハジア地方派遣看護婦) 橋都氏
- 15:00~15:40 コメンテーターからのコメント
青山温子氏(名大医学研究科教授)
佐藤安信氏(名大国際開発研究科教授)
- 15:40~16:40 来場者からの質問とディスカッション

という内容でした。今回は、あくまで市民を対象にしているため、出来る限り多くの来場者の方に参加して頂けるようにと、最後の質疑応答の時間を1時間と最大限にとりました。

主催者としては、進行が全く読めないため、出たとこ勝負になるという危険はありましたが、「一方的な講義ではない、市民参加のシンポジウム」という当初の理想を優先したスケジュールとしました。結果的には、質問も多く出て、熱いディスカッションとなり、当初の懸念は全くの杞憂に終わりました。

また、シンポジウム終盤での、MSFの入井氏の「我々は、マザーテレサでもシュバイツァーでもない。ボラン

ティアもそれぞれの人生や欲望を背負って生きているのであり、それをトータルで理解しようとするMSFの深い姿勢に共感を覚えて、私はMSFに参加しているのです。」という言葉には、来場者や我々スタッフも、大きな感銘を受けました。

<シンポジウムの結果>

シンポジウムには、72名の来場者があり、そのうち42名の方からアンケートへの回答を頂きました。

来場者の属性を見てみると、高校生、大学生、地域の主婦、医師、社会人、「八事町づくり協議会」幹事など、GSIDに初めて来た、という人も多く、「市民フォーラム」の最大の目的であった「地域と研究科をつなぐ」ことは果たしたと思います。

また、シンポジウムについては、「面白かった」が36人、「何も思わなかった」が0人、「期待はずれだった」が1人、記入なしが5人、という結果で、全体的には高い評価を頂けたと思います。

このシンポジウムは、計画の立案、交渉、準備、広報、実施、資金調達に至るまで、全て学生の力だけで実現したものであり、自分達の永年のアイデアを市民にぶつけ、そして評価されたという意味では、とても嬉しく、また誇らしく思っています。

なお、このシンポジウムの内容については、報告書(議事録を含む)としてGSIDのホームページにリンクして頂いている「GSID市民フォーラムのページ」にて公開する



予定です。

未筆ながら、このシンポジウムの開催にあたり、応援して頂いた皆様に、心より感謝致します。

有り難うございました。

スタッフの人事異動

[教 官]

H12.10.1 転入

国際コミュニケーション専攻国際言語文化情報システム講座
大名 力 助教授(群馬大学社会情報学部講師から)

H12.11.1 転出

論文執筆補助担当(日本語担当)
関根久雄助手(筑波大学社会科学系講師へ)

H13.1.1 採用

国際協力専攻国際協力政策講座
伊東早苗助教授(英国バース大学客員研究員から)

H13.1.16採用

論文執筆補助担当(日本語担当)
野田真里助手

H13.4.1 転出
国際コミュニケーション専攻国際コミュニケーション講座
津田幸男教授（筑波大学現代語・現代文化学系教授へ）

H13.6.16 転入
国際コミュニケーション専攻国際コミュニケーション講座
内田綾子助教（本学言語文化部助教から）

H13.4.1 協力講座教官の交替
国際協力専攻比較国際法政システム講座
松井芳郎教授から小畑 郁助教へ
国際協力専攻国際文化学講座
田村 均教授から岡本耕平教授へ

[事務]

H13.4.1 転出
教務担当主任 浅田礼子（工学部・工学研究科教務課へ）

H13.4.1 転入 教務担当主任 伊藤嘉奈子（共通教育室から）

客員研究員の紹介

岡田尚美（国際開発高等教育機構事業部次長）
研究題目：開発プロジェクトの管理運営手法研究について
期 間：H13.4.1 - H13.9.30

田中圭治郎（仏教大学教育学部教授）
研究題目：文化的多元主義的アプローチによる教育開発
期 間：H13.4.1 - H13.6.30

馬場雄司（三重県立看護大学看護学部助教）
研究題目：タイにおける開発と人類学
期 間：H13.4.1 - H13.6.30

阿部浩己（神奈川大学法学部教授）
研究題目：国際人権法の理論的諸問題
期 間：H13.4.1 - H13.6.30

神原 浩（朝日新聞名古屋本社学芸部編集委員）
研究題目：マスメディア史
期 間：H13.4.1 - H13.9.30

金谷尚知（日本大学国際関係学部助教）
研究題目：農業農村開発計画
期 間：H13.7.1 - H13.9.30

都築くるみ（愛知学泉大学コミュニティ政策学部助教）
研究題目：日本の地方自治体における外国人労働者との
共生をめぐる課題
期 間：H13.7.1 - H13.9.30

土生英里（三和総合研究所国際経営開発部チーフ・コンサル
タント）
研究題目：ベトナムにおける貧困と法
期 間：H13.7.1 - H13.9.30

銭 右錫（中京大学経営学部専任講師）
研究題目：国際合併事業の寿命に関する研究
- 日韓のジョイントベンチャーに焦点を当てて -
期 間：H13.10.1 - H14.3.31

上山邦雄（城西大学経済学部教授）
研究題目：新トヨタ生産システムの研究
期 間：H13.10.1 - H13.12.31

本名 純（立命館大学国際関係学部助教）
研究題目：スハルト以後のインドネシアの軍研究
期 間：H13.10.1 - H14.1.31

湯浅茂雄（実践女子大学文学部教授）
研究題目：語彙論の方法と課題
期 間：H13.10.1 - H13.12.31

安村仁志（中京大学教養部教授）
研究題目：ロシアにおける宗教問題
期 間：H13.10.1 - H14.3.31

江原裕美（帝京大学法学部助教）
研究題目：中南米における教育開発政策の課題
期 間：H14.1.1 - H14.3.31

高杉 直（帝塚山大学法政策学部助教）
研究題目：国際電子商取引の法的研究
期 間：H14.1.1 - H14.3.31

横山和子（東洋学園大学人文学部教授）
研究題目：国際機関における人的資源管理
- グローバル時代の人材育成 -
期 間：H14.2.1 - H14.3.31

Jean - Pierre Giraud（ジャンピエール ジロー）
（リヨン第3大学外国語学部助教）
研究題目：海と山における神道儀式の研究
期 間：H13.4.1 - H13.6.30

Thanh Phan（ティン ファン）
（ホーチミン国家大学人文社会科学大学史学科民族学部門主任）
研究題目：ヴェトナムの文化保存と観光開発
期 間：H13.4.24 - H13.8.16

薛 瀾（シュエ ラン）（清華大学公共管理学院教授）
研究題目：科学技術開発政策に関する日中比較研究
期 間：H13.5.7 - H13.8.31

丘 桓興（チュウ ファンシン）（「人民中国」雑誌社高級編集者）
研究題目：日中における民俗文化の交流と伝播
期 間：H13.7.1 - H13.12.16

Robert Margolis（ロバート マーゴリス）（カナダ・弁護士）
研究題目：Protection of SME's trading and investing
in the less developed countries in Asia
期 間：H13.8.17 - H13.12.9

Abrenica Ma - Joy Villarcál（アブレニカ ジョイ ヴィラルカル）
（フィリピン大学ディリマン校経済学部助教）
研究題目：通信・電力セクターの民営化・競争政策：
ゲーム論的アプローチ
期 間：H13.11.1 - H14.1.31

Davoud Charmi（ダヴード チャルミー）
（イラン国際問題研究所中央アジア研究センター副センター長）
研究題目：中央アジアの政治・経済・社会変動と国際関係
期 間：H13.12.10 - H14.13.31

Kolker Jakob Moiseyevich（コルケル ヤコブ モイ
セイエヴィチ）（リャザン国立教育大学英語学科長）
研究題目：外国語教育方法論
期 間：H13.12.17 - H14.3.31